広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	周京と杭州詩壇
Author(s)	市瀬, 信子
Citation	中國中世文學研究 , 67 : 39 - 61
Issue Date	2016-03
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00042527
Right	
Relation	

周京と杭州詩壇

市瀬信子

はじめに

清代の杭州詩壇の隆盛は大きく二期に分けることができる。一つは七人の杭州詩人によって『南宋雑事詩』が制作された雍正元年（一七二三）から二年にかけての期間である。作者である沈嘉轍、呉焯、陳芝光、符曾、趙昱、厲鶚、趙信は、いずれも杭州の無官の詩人達であった。彼らは趙昱、趙信の蔵書楼における唱酬の中で、豊富な文献と深い学識を元に、南宋の故事、史跡を題材とした、計一百一首からなる大作を完成させた。この作品の後、厲鶚、趙昱、趙信、符曾は乾隆元年の博学鴻試に推挙された。これが清代杭州詩壇の第一期の隆盛期である。「南宋雑事詩」の時期を境に、厲鶚、符曾を始め、多くの杭州詩人が杭州の地を離れ、他の地で活動し始めた。杭世駿らのように任官の為に杭州を離れた者もいたが、揚州馬曰琯の小玲瓏山館や天津査為仁の水西荘に寄寓した厲鶚、金農、符曾、陳章、汪沆、呉廷華らのように、富裕且つ知的な蔵書家の元に身を置き、学問、芸術に没頭しつつ、その地の詩壇の唱和で活躍した者もいた。このように、第一期の隆盛期の後、杭州詩壇は、移動する詩人達として、杭州以外の地で名を挙げたのである。

第二の隆盛期は、二十年後、杭州の外に出て活躍していた詩人達が、再び杭州に集った乾隆年間初期である。杭世駿、厲鶚を始めとし、杭州を離れて学者、芸術家、詩人として名をなした名士達が次々に杭州に戻り、地元の耆旧、方外たちと詩社を結んで盛んに詩会を開いた。「乾隆初、杭州詩酒之会最盛。（乾隆の初め、杭州詩酒の会最も盛ん。）」（袁枚『随園詩話』巻三―六四）と称されたこの二度目の隆盛期は、「吾郷詩社、自癸亥以後、称最盛者十年。（吾が郷の詩社、癸亥より以後、最盛と称すること十年。）」（『両浙輶軒録』巻十九「梁啓心」）と言われるように、癸亥つまり乾隆八年（一七四三）から十年間であったとされる。具体的には、杭世駿が北京から戻ってきて杭州で南屏詩社を結んでいた期間である。乾隆十七年、杭世駿は粤秀書院主講となって広州に出、同年詩社のもう一人の大物である厲鶚が世を去った。杭州詩社は彼ら名士二人を失い、衰退したと言われるのだが、実際にはそれと同じ頃、詩会で活躍した耆旧達が次々に世を去ったことも詩社衰退の大きな要因である。その耆旧の代表格が乾隆十四年に亡くなった周京である。

周京については、全祖望が、「杭之詩人為社集、群雅所萃、奉穆門為職志。（杭の詩人　社集を為し、群雅の萃まる所、穆門を奉じて職志と為す。）」と、詩社の中核をなした人物であるとした上で、周京が世を去るや「穆門死、湖社諸人一若失其憑依者。（穆門死し、湖社の諸人一へに其の憑依する者を失ふが若し。）」（『鮚埼亭集』内篇巻十九「周穆門先生墓志銘」）と詩社がよりどころを失ったと述べる。また金志章も周京の死に、「湖南寂寞吟壇冷（湖南寂寞　吟壇冷ゆ）」（『無悔斎集』附録　金志章「哭周穆門先生」）と、その死とともに詩社が衰退したと述べている。周京の詩社における影響の大きさがわかると同時に、その死が詩社衰退に繋がったことがうかがえる。

しかし、当時杭州詩壇での知名度が高かったにもかかわらず死後周京の存在は次第に忘れられ、やがてその名は、厲鶚、杭世駿らの陰に隠れてしまったといえる。とはいえ、全祖望の墓志銘に見えるように、当時詩壇の中心にいたのであれば、周京を無視して当時の杭州詩壇の状況を正しく把握することはできない。ゆえにまず周京という詩人について詳しく知っておく必要がある。

そこで本稿では、周京の人生を辿りつつ、杭州詩壇との関わりを明らかにし、更に周京を通して、彼が晩年活躍した杭州詩社がいかなるものであったかを見ておしてみたい。

一、周京の文学史上の評価

周京（一六七七～一七四九）は、字を西穆、一の字を少穆といい、また辛老という。穆門と号し、晩年は東双橋居士と号している[1]。杭州銭塘の人である。雍正年間に諸生となり、乾隆元年に六十歳で博学鴻試に推挙されるも応じず、後に州同知を考授せられた。晩年は故郷杭州で詩社の同人たちと唱酬を繰り返し、乾隆十四年、七十三歳で世を去った。『無悔斎集』十五巻があり、これは遺稿を遺児の依頼で厲鶚が編纂して十分の二、三を削除し、唱酬を共にした友人で乍浦理事同知であった舒瞻が資金提供して刊行したものである[2]。桑調元の墓志銘によると、元々は古文詩詞合わせて三十六巻があったものを、舒瞻がまず詩集十五巻を刊行し、残りの原稿は家に保存してあったという[3]。しかし現存するのは、詩集『無悔斎集』十五巻のみである。

周京の生涯を記すものとしては、全祖望の「周穆門墓志銘」（『鮚埼亭集』内篇巻十九）、桑調元「周徴士穆門墓志銘」（『無悔斎集』附録）がある。他に杭世駿が作った伝があったようだが、現存の杭世駿『道古堂集』には収録されていない[4]。また、厲鶚「無悔齋詩集序」は、周京の文学に関する経歴を記す。

まず、全祖望「周穆門墓志銘」から、当時の周京の文学とその名声に関する部分を取りあげてみる。

穆門以詩名天下五十余年、平生嘗徧歴秦、斉、晋、楚之墟、所至、巨公大卿皆為倒屣。
穆門詩を以て天下に名あること五十余年、平生嘗て秦、斉、晋、楚の墟を徧歴し、至る所、巨公大卿皆為に倒屣す。

「以詩名天下五十余年」とあるが、周京が七十三歳で亡くなっていることから逆算すると、二十歳の頃にはすでに詩人として広く名が知られていたことになる。また各地を遠遊するのは、三十二歳以降と考えられるが[5]、その時にはいずれの地でも名士達が皆彼の到来を待ちかねていたという。これらの記述からは、周京の詩人としての知名度と人気がうかがえる。

また地元杭州の詩社における人気については、以下のように記されている。

杭之詩人為社集、群雅所萃、奉穆門為職志。…詩成穆門以長箋写之、酔墨淋漓、姿趣頽放、或弁数語於其端、得者以為鴻宝。湖社風流、百年以来、於斯為盛、皆穆門之所鼓動也。…穆門死、湖社諸人一若失其憑依者、其為人可想見也。
杭の詩人　社集を為し、群雅の萃まる所、穆門を奉じて職志と為す。…詩成れば穆門長箋を以て之を写し、酔墨淋漓、姿趣頽放たりて、或ひは数語を其の端に弁ずれば、得る者以て鴻宝と為す。湖社の風流、百年以来、斯に於いて盛と為すも、皆穆門の鼓動する所なり。…穆門死し、湖社の諸人一へに其の憑依する者を失ふが若く、其の人と為り想見すべきなり。

これは乾隆初期の杭州詩社の隆盛期に於いて、周京が杭州詩壇の領袖と目されていたことを伝えるものである。完成した詩を書写すれば、墨痕も麗しく、数語を書き添えたものを手に入れた者は宝とした、というのは、その人気を示すものである。更に杭州西湖の詩社が、百年来隆盛を迎えたのは、皆周京の鼓動による、とも言う。「百年来」というのは、明代の「西湖八社」からの時間をいうものであり、乾隆期の杭州詩社の隆盛が、歴史的な事件であったことがわかる。この時詩社を牽引し、その支柱となったのが周京だというのである。周京は、当時の詩社の最重要人物としてとらえられているといっても過言ではない。

ところで、文学史上、周京はどのように扱われてきたのであろうか。この乾隆期の杭州詩社で活躍した厲鶚、杭世駿らを中心とする詩人達は、浙派という詩派としてとらえられるのが一般的である。浙派研究の代表的成果とされる張仲謀『清代文化与浙派』では、浙派の活動時期を四段階にわけた上で、「第三段階は浙派の繁栄期であり、主要な創作活動は雍正朝と乾隆前期にある。この時期の詩人は、厲鶚をリーダーとし、南屏詩社のメンバーを主体とした。主だった詩人には、杭世駿、全祖望、金農、丁敬、胡天游、呉穎芳、汪沆、陳章、姚世鈺、斉召南等がおり、これもいわゆる狭義の浙派詩群である。」[6]と言う。南屏詩社とは杭州詩社の代表格であり、全祖望が記していたのは、この詩社の様子である。しかし、張仲謀は主要詩人の中に、周京の名を入れていない。一方、「在査慎行和厲鶚二代人之間、有必要介紹呉焯、周京等人、這是一批与厲鶚存有師友之誼、唱和頻頻、対「浙派」的発展很有関係的詩人。……嘉慶五年（一八〇〇）呉顥編刊『杭郡詩輯』十六巻、輯自順治以来詩人多達一千四百余、高峰期正是乾隆期、周京是個核心人物。」（厳迪昌『清詩史』浙江古籍出版社　二〇〇二「第六章　乾嘉時期地域詩派詩群巡視　第一節　以厲鶚為代表的浙派」）あるいは、「周京在杭州詩壇是個中心人物。他比浙派領袖厲鶚大十五歳、可称師友、也是浙派的核心成員」（張兵等撰『文化視域中的清代文学研究』王小恒「第三章　浙派嬗変及厲鶚的文学思想、著述和交游」（人民出版社　二〇一三）のように、周京を乾隆期浙派の中核となる人物とする見解も見られる。周京に対する評価が一定していないのは、そもそも浙派のとらえ方が一定でないためと考えられる。しかし逆に、周京という一詩人を通してみることで、当時の杭州詩社あるいは浙派を新たな見方でとらえなおすことができるだろう。

そこで、まず周京の生涯と文学活動を明らかにしつつ、そこから彼の杭州詩壇における位置づけを改めて考えて考察してみる。

二、遠遊から博学鴻試まで（康熙四十七年～乾隆元年）

『無悔斎集』は、康熙四十七年（一七〇八）、周京三十二歳からの作品を収録する。当時周京は杭州にいた。金農はこの頃から周京と交流があったらしく、周京の死に際して、「論交四十載、老友忽云徂。（論交すること四十載、老友　忽ち云に徂く。）」（『無悔斎集』附録「哭周穆門先生」）と詩に詠じている。周京が世を去ったのは七十三歳であるから、四十年前というと、周京が三十歳前後の時である。金農は、当時厲鶚とも交遊している。周京は金農より十歳、厲鶚より十五歳年上であり、年下の友人に囲まれてリーダー格になっていたと思われる。

三十二歳の時、江西に旅立つ。これ以後、六十五歳頃まで、周京はほとんどの人生を旅の中に過ごすことになる。出発当時周京はすでに広く名を知られており、各地で彼の到来を待ち受ける動きがあったようだ。全祖望「周穆門墓志銘」には、「平生嘗徧歴秦、斉、晋、楚之墟。所至、巨公大卿皆為倒屣。（平生嘗て秦、斉、晋、楚の墟を徧歴し、至る所、巨公大卿皆為に倒屣す。）」と、各地で名士達が周京の訪問を待ちかねていたことを記している。それは「夙有詩名、常徧歴秦、齊、晉、楚、所至公卿皆倒屐迎之。」（『清史列伝』巻七十一杭世駿）とあるように、「詩名」によるものだ

ったのであろう。

『無悔斎集』によると、この後、康熙四十九年（一七一〇）には、山東から河北へと旅をしている。康熙五十年（一七一一）から康熙五十三年（一七一四）までの作品は収録されておらず、その間の活動の実態は不明である。康熙五十四年（一七一五）、周京は杭州に帰る。この頃、厲鶚と盛んに詩会を開き楽しんでいたことが、厲鶚「無悔斎詩集序」に見える。

（往時、吾郷士友専攻挙子業、例不作詩。）乙未、丙申間、予輩数人為文字之会、暇即相与賦詩為楽。酒闌灯灺、逸韻横飛、必推周兄穆門為首唱。穆門詩主気格、以豪健為尚、淋漓排奡、（往往）一座尽傾。詩成、毎擊節自歌、淵淵（乎）声若出金石、予輩亦従而和之。少年気盛、曽不知老之将至也。

＊（　）内は、『無悔斎集』には無く、『樊榭山房文集』巻三によって補う。

（往時、吾が郷の士友専ら挙子の業を攻め、例ねて詩を作らず。）乙未、丙申の間、予が輩数人文字の会を為り、暇あれば即ち相与に詩を賦して楽しみと為す。酒闌に灯灺し、逸韻横飛するに、必ず周兄穆門を推して首唱と為す。穆門詩は気格を主とし、豪健を以て尚しと為し、淋漓として奡を排し、（往往）一座尽く傾く。詩成れば、毎に節を擊ちて自ら歌ひ、淵淵（乎）として声　金石より出づるが若く、予が輩も亦た従ひて之に和す。少年気盛んにして、曽て老いの将に至らんとするを知らざるなり。

「乙未、丙申」は、康熙五十四（一七一五）、五十五年（一七一六）である。この時周京は三十九、四十歳、厲鶚は二十四、二十五歳の若者であった。「文字之会」とは、いわゆる詩酒の会である。周囲が科挙の勉強に取り組み、詩を作ることをよしとしなかった時期に、厲鶚と仲間は詩酒の会を開く。酒宴がたけなわとなり灯りも燃え尽きようとする頃合い、風雅な詩が自在に飛び交う時となると、必ず周京を首唱に推したという。周京の詩は気品があり、豪健を尚び、伸びやかで勢いがあり、しばしばその場にいる人誰もが心を奪われた。詩ができあがると、いつも拍子を取って自ら歌い、その声は楽器の音色のように響き、厲鶚らは彼の詩に唱和したという。老いが近づいてくることなど考えてもみなかった、若い意気盛んな頃の思い出である。詩会での周京は、詩も人間も豪放で魅惑的であり、厲鶚達若者が、詩会で周京を慕った心情がよくわかる。

こうした周京と厲鶚達の詩会が、広く話題となっていたらしいことがうかがえる逸話がある。

厲樊榭未第時、与周穆門諸人好請乩仙。一日、有仙人降盤書曰、「我鶴静先生也。平生好吟、故来結吟社之歓。…」。…毎日祈請、但書鶴静先生四字。

向空焚之、仙輒下降、有所唱和。詩尤清麗、和雁字至六十首、如是一年。

（袁枚『子不語』巻十五「鶴静先生」）

厲樊榭がまだ試験に及第しなかった頃に、周穆門らの仲間と、よく乩仙（こっくりさん）を招請した。ある日、乩仙が盤に降りてきて次のように書いた。「私は鶴静先生である。平生吟誦を好んでいるゆえに、吟社の歓を結びたいと思って来た…」。…毎日降臨するよう祈祷するのだが、ただ「鶴静先生」の四文字を書くだけだった。空に向かって香を焚くと、そのたびに乩仙が降臨し、詩を唱和した。その詩はとりわけ清麗であって、雁字に和韻して六十首もの詩を作ったこともあり、こうして一年が過ぎた。

いわゆるこっくりさんが詩社の楽しみを共にしようとして、厲鶚と周京のもとを訪れたという怪異譚である。「厲樊榭未第時」とあるのは、厲鶚が郷試に合格した康熙五十九年以前、つまり先の「無悔斎詩集序」で、周京を首唱として文字の会を開いていたと記した頃ということになる。吟社の楽しみを求めて、幽霊までもが厲鶚と周京の元を訪れたという逸話は、当時周京を領袖とする彼らの詩会がいかに話題になっていたかを示すものである。

康熙六十年（一七二一）まで、周京、厲鶚は唱和を楽しんでいる。周京『無悔斎集』、厲鶚『樊榭山房集』には、彼らの唱和詩が数多く見える[7]。

その後、周京は再び北上し、康熙六十一年（一七二二）から蘇州を経て、河北に向かうが、雍正二年（一七二四）に母の訃報を聞き、帰郷する。この間、杭州では雍正元年から二年にかけて、厲鶚、沈嘉轍、呉焯、陳芝光、符曾、趙昱、厲鶚、趙信によって『南宋雑事詩』が作られた。これは杭州詩人の唱酬の場から生まれた歴史的大作である。遠遊していた周京はもちろん関わってはいなかったが、この同人達と交流があったことが、様々な資料から覗える[8]。

雍正四年（一七二六）には再び杭州を離れて河北に向かい（『無悔斎集』巻三）、雍正五年から七年にかけては甘粛を回って西安方面に赴き、再び北京に赴いた（『無悔斎集』巻四～巻五）。その頃の周京に対する評価を示すものの一つに、査慎行（一六五〇～一七二七）の詩がある。雍正四年の古詩「答銭塘周少穆次来韻」（『敬業堂集続集』巻四　余生集下）に、「周生湖山彦、誉擅東南宝。（周生　湖山の彦、誉は東南の宝を擅にす。）」の句が見える。この時査慎行は七十七歳、周京は五十歳。当代を代表する詩人査慎行が、杭州を代表する詩人として周京を認めていたことを、この句は示している。

その後、雍正九年（一七三一）、五十五歳の時に、周京は杭州に戻る。雍正十一年末から十二年夏頃までは杭州で厲鶚らと唱酬しており、『無悔斎集』巻六、『樊榭山房集』巻七に唱和詩がある。その唱和の中で

周京が詠じた詩が「十二月二十二日同樊榭、耕民放舟湖上、時快雪初晴、風物閒静、重過酒舎、念欒城、尺鳧已下世、感今念昔、弥覚清游之足重也、分韻同作」（『無悔斎集』巻六）である。これは『南宋雑事詩』の作者であった沈嘉轍と呉焯の死を悼んで酒楼で詠じた詩である[9]。この詩が、酒楼の壁に書かれた題壁詩として、杭州で話題を集めることとなる。この翌年の周京の詩に、「昨年歳晩、同樊榭、耕民来湖上、重題楼壁、而良友至携筆墨往写之、荒詞流伝慙荷交、并一時佳話、未敢没也、復題壁」（『無悔斎集』巻六）があり、この詩を人々が書き写そうとして訪れ、詩句が伝えられて佳話とされ、まだ消えずに残っていたため、更に題壁詩を一首したためたことを記している。その新たな詩の一句目が「詩価争如酒価高（詩価　争（いかで）　酒価の如く高からん）」で、か自注に「抄詩復事宝酒、謂是詩以価得之者（詩を抄するに復た宝酒を事とす、是れ詩は価を以て之を得る者なるを謂ふ）」とあり、酒楼に入るために高い酒代を払ってまで、詩を書き写そうとする者が多かったことを記している。桑調元の「周徵士穆門墓志銘」にも、このことが記される。

晩息影蓬廬、共里中詩老結吟社、策杖出西郭、扁舟草屬、縦浪湖山間。酔題酒楼壁、好事競鈔詩買酒。有「詩価争如酒価高」之句、勝事足艶千古。

晩に蓬廬に息影し、里中の詩老と共に吟社を結び、杖を策きて西郭を出で、扁舟草屬もて、浪湖山間を縦にす。酔ひて酒楼の壁に題し、好事のもの競ひて詩を鈔して酒を買ふ。「詩価争か酒価の如く高からん」の句有り、勝事　千古に艶とするに足る。

この墓志銘では、周京が晩年に杭州に戻って詩社に参加していた時の作であるかのように記されているが、先に見た通り、この詩は五十五歳の時の作で、晩年詩社に参加するのは、これより十年ほど後のことである。ただ、桑調元の記述は必ずしも間違っているとは言えない。実は袁枚もこの題壁詩を目撃していたことを以下のように記している。

余幼時遊西湖、見酒楼号五柳居者、壁上題詩甚多、不久即圮去。惟西穆先生一首、墨瀋淋漓、字写争坐位帖、歴七、八年如新。酒楼主人及来遊者皆護存之、敬其為名士故也。題是、「冬日同樊榭放舟湖上、念欒城、尺鳧都已下世、弥覚清遊之足重也。分韻同作」。

（『随園詩話』巻九-八二）

余幼き時西湖に遊び、酒楼の五柳居と号する者を見るに、壁上題詩甚だ多きも、久しからずして即ち圮（ぬ）り去る。惟だ西穆先生の一首のみ、墨瀋淋漓、字は争坐位帖を写し、七、八年を歴て新たなるが如し。酒楼の主人及び来遊せし者皆之を護存するは、其の名士為るを敬ふが故なり。題は是れ（ゐ）「冬日樊榭と同に舟を湖上に放ち、欒城、尺鳧都已に下世せしを念ひ、弥（いよいよ）清遊の重んずるに足るを覚ゆるなり。分韻同作」。

題壁詩は普通すぐに塗りつぶされてしまうものなのだが、周京の一首だけが墨色も鮮やかに残っていたという。「写争坐位」は、顔真卿が郭英乂に与えた書簡の草稿のこと。周京は書の達人でもあったため、その書体に倣って詩を書いたのだ。袁枚が目撃した時は、すでに作成から七、八年経っていたのに、書いたばかりのようだったのは、酒楼の主人も客も名士周京を知っており敬った結果だという。袁枚の記述に従うならば、桑調元が見た時にもまだ新しい詩の如く壁に残っていたことになる。この逸話は、周京が杭州人にいかに尊敬され、愛されていたかをよく物語っている。

この間、雍正十一年（癸丑）に、杭世駿は、杭州で詩社に参加したという。

癸丑之秋、余自京帰里、与結湖山之社。

（『道古堂文集』巻四十七「林阮林墓碣」）

癸丑の秋、余　京より里に帰り、湖山の社を結ぶに与かる。

「湖山之詩社」について、周京も厲鶚も記してはいないが、話題になった周京の題壁詩は、杭世駿、周京、厲鶚を含む詩社の中で、亡くなった同人を悼んで詠じられた可能性もある。このように、周京、厲鶚、杭世駿らは、ほとんど故郷を離れているのではあるが、故郷に帰る度に集まり、唱和を行っていたようだ。

こうして杭州で唱和した後、雍正十二年秋には再び山西に向かって旅立つ。杭州の友人であった朱樟（一六七七～一七五七）が、同年春に沢州府の知府として赴任しており、その元を訪れたのである。朱樟はここで『沢州府志』を編纂し、十三年に完成させているが、周京も編纂事業に加わっている[10]。

周京の身に大きな変化があったのは、乾隆元年である。この年周京は山西、陝西、甘粛へと旅を続けていたが、姚三辰によって博学鴻詞に推挙された。時に周京は六十歳。全祖望の墓志銘によると、北京まで行ったものの、病を口実に、結局試験を受けることなく杭州に帰ったという[11]。この年の博学鴻詞には、杭州から二十七名が推挙され（『民国杭州府志』巻一百十一選挙五、国朝、制科）、厲鶚、周京の他、唱酬の仲間でもあった杭世駿、符曾、桑調元、趙昱、趙信、汪沆、陳撰、汪台らも推挙された。博学鴻詞に推挙されたことは、名士たることを社会的に保証されたことになる。杭州詩壇は、ここに至ってその名声を確かなものとした。

三、杭州詩社隆盛期（乾隆元年～乾隆十四年）

その後、周京はしばらく杭州に留まったが、乾隆三年に再び北上し、沢州の朱樟の元で唱酬を繰り返した後、乾隆六年に杭州に帰る。時に周京六十六歳。以後

は杭州に住み、多くの詩人達と盛んに唱和を行った。そしてこれが杭州詩会の最盛期となるのである。

周京が杭州に戻ったのは乾隆六年だが、この頃各地に散っていた多くの杭州詩人たちも、次々に杭州に戻ってきた。多くの詩人がこの時期再び杭州に集ったことは、次のように記されている。

乾隆庚申、同書与先生長君仍叔同入郡庠、始獲拝先生于牀下。…越三年、金冬心先生自揚帰。…会其時、郷耆宿或致仕帰田、或倦游還里。如顧月田、沈峙公、鄭璣尺、金江声、呉東壁、周穆門、魯秋塍、厲樊榭、杭菫浦、施竹田諸先生、一時并集。而方外則有梵虚、讓山、高人則先生与金先生両人、詩社為最盛焉。

（丁敬『硯林詩集』梁同書序）

乾隆庚申、同書　先生の長君仍叔と同に郡庠に入り、始めて先生に牀下に拝するを獲。…越ゆること三年、金冬心先生　揚より帰る。…会ま其の時、郷の耆宿或ひは致仕して帰田し、或は倦游して還里す。顧月田、沈峙公、鄭璣尺、金江声、呉東壁、周穆門、魯秋塍、厲樊榭、杭菫浦、施竹田諸先生の如き、一時に并集す。而して方外には則ち梵虚、讓山有り、高人には則ち先生と金先生と両人有りて、詩社最盛と為す。

乾隆庚申とは乾隆五年のこと。その三年後に金農は揚州から杭州に帰郷する。同時に杭州を離れていた士が、「致仕帰田」とあるように、官職を離れて帰郷し、あるいは「倦游還里」とあるように、遠遊から戻ってきた。ここに挙げられた顧之珽、沈埕、鄭江、金志章、呉廷華、周京、魯曽煜、厲鶚、杭世駿、施安は、いずれも杭州以外の地で活躍し、この頃故郷に戻ってきた人々である。例えば杭世駿（菫浦）は、武英殿纂修にまで登りつめたが、乾隆八年に時務策が乾隆帝の怒りを買い、罷免されて北京から杭州に帰ってきた。顧之珽（月田）は、知県を務めて信頼を得ていたが、蜚語によって杭州に帰った。金農は揚州八怪の一人として詩書画で名を馳せた後、杭州に戻り、同時期に周京もまた各地を回った後、山西から杭州に戻ってきた。厲鶚は揚州の韓江詩社の領袖として活躍し、南宋に関連する書物を多く編纂してすでに著名人であったが、乾隆五年に杭州に居を移した。呉廷華は、天津水西荘の詩社で活躍し、『天津府志』等を編纂した後に、北京を経て杭州に戻った。他の詩人の帰郷の様子は省略するが、実に多くの詩人が、様々な理由でこの時期杭州に帰った。この時点で官職にあったものはほとんど無く、不遇の名士達が杭州に揃ったのである。

乾隆始めの杭州詩壇第二の隆盛期は、このように、各地の詩壇の名士として活躍した杭州詩人が故郷に戻り詩会を開くことでもたらされた。厲鶚や周京が若い頃から杭州で唱和をもって名を知られていたことは先に述べたとおりである。そして今再び、杭州で彼らによって唱和が行われたのである。

杭州詩人である袁枚は、杭州詩会の隆盛を次のように伝えている。

乾隆初、杭州詩酒之会最盛。名士杭、厲之外、則有朱鹿田樟、呉鷗亭城、汪抱樸台、金江声志章、張鷺洲湄、施竹田安、周穆門京、毎到西湖堤上、掎裳聯襼、若屏風然。有明中、讓山両詩僧留宿古寺、詩成伝抄、紙価為貴。……四十年来、儒、釈両門、一斉寂滅、竟無継起者。

（『随園詩話』巻三―六四）

乾隆の初め、杭州詩酒の会最も盛ん。名士杭、厲の外、則ち朱鹿田樟、呉鷗亭城、汪抱樸台、金江声志章、張鷺洲湄、施竹田安、周穆門京有り、西湖堤上に到る毎に、掎裳聯襼し、屏風の若く然り。明中、讓山両詩僧有りて古寺に留宿し、詩成れば伝抄せられ、紙価為に貴し。……四十年来、儒、釈両門、一斉に寂滅し、竟に継いで起つ者無し。

乾隆年間の始めが、杭州詩会が最も隆盛の時だったという。名士杭世駿、厲鶚以外に名があがるのは、朱樟、呉城、汪台、金志章、張湄、施安、周京である。代表的な詩人の中に、周京の名も見える。西湖の長堤にこれら詩人達が綺羅星の如く居並ぶというのがこの当時の光景であった。明中、讓山は、当時浄慈寺にいた僧侶で、詩僧しても知られる。この時期の詩会は、浄慈寺で開催されることが多かった。ゆえに南屏詩社の記録は、際祥纂輯『勅建浄慈寺志』、及び同寺の僧であり、詩会に参加した釈篆玉の『話堕集』、釈明中の『梵虚大師遺集』中に多く見える。詩会の詩が、またたくまに伝抄されて、広く読まれたというのは、同人の間だけでなく、広く世間の注目を集めていたということだろう。

まず詩社を開設したのは、顧之珽である。

憶歳壬戌、癸亥間、顧丈月田以詞場宿老、号召同里詩人為社於西湖、月必五六会。蒸然発動、転相招引、振采騰華、於時最盛。迨月田下世、西湖壇墠稍就衰歇矣。

（杭世駿『道古堂文集』巻十二「遠村吟稿序」）

憶ふ　歳壬戌、癸亥の間、顧丈月田　詞場の宿老を以て、同里の詩人を号召して社を西湖に為し、月に必ず五六たび会せしを。蒸然として発動し、転た相ひ招引し、振采騰華し、時に於いて最も盛ん。月田下世するに迨び、西湖の壇墠稍や衰歇に就く。

これは顧之珽（月田）が、杭州詩人を集めて詩社を開いた様子を記したものである。壬戌、癸亥は乾隆七、八年にあたり、詩会は月に五、六回というほど頻繁に開催されていたようだ。顧之珽の詩社については、杭世駿による顧之珽の墓志銘にその様子が描かれる。

既帰里、与里中三数耆老続南屏八社之集。章逢之

儒、瓶払之衲、交進輻輳、並遊其門。務奇闘険、窮日累夕、至鬻宅以継酒食、而君不厭也。
（『道古堂文集』巻四十二「文林郎行人司行人管理広東電白県知県事顧君墓志銘」）

既に里に帰るや、里中の三数の耆老と南屏八社の集に続く。章逢の儒、瓶払の衲、交進輻輳し、並びに其の門に遊ぶ。奇を務め険を闘はしめ、窮日累夕、宅を鬻ぎて以て酒食を継ぐに至るも、君厭はざるなり。

「南屏八社」は、明朝の詩社「西湖八社」のこと。八社の一つが南屏詩社で、浄慈寺等を拠点として活動していた。それに続くというのは、南屏に詩社を結んだということであろう。儒者、僧侶らが集まり、連日一日中詩会を楽しんだという。しかし、詩会を主催するには、かなりの費用が必要になる。顧之珽はそのために自宅を売却することすら厭わなかったという。

顧之珽、字搢玉、号茶園、又号月田、仁和人。…中蜚語罷帰、与里中周京穆門、朱樟鹿田、許大綸初観、鄭江筠谷、金志章江声、呉廷華東壁、戴廷熺鸝亭、厲鶚樊榭、汪台復園、梁啓心菉林、杭世駿菫浦、丁敬竜泓、張湄柳漁、江源敬斎、陳兆崙句山、施安竹田、汪沆西顥、顧之麟寸田、為湖南詩社、掎裳聯襼、如屏風然。西泠十子後、此為極盛矣。
（『国朝杭郡詩輯』巻八　顧之珽）

顧之珽、字は搢玉、茶園と号し、又月田と号す、仁和の人。…蜚語に中りて罷帰し、里中の周京穆門、朱樟鹿田、許大綸初観、鄭江筠谷、金志章江声、呉廷華東壁、戴廷熺鸝亭、厲鶚樊榭、汪台復園、梁啓心菉林、杭世駿菫浦、丁敬竜泓、張湄柳漁、江源敬斎、陳兆崙句山、施安竹田、汪沆西顥、顧之麟寸田と、湖南詩社を為り、掎裳聯襼、屏風の如く然り。西泠十子の後、此れ極めて盛んと為す。

これは顧之珽が杭州詩人たちと詩社を開いたことを記したものである。顧之珽の詩社の面々とは、周京、朱樟、許大綸、鄭江、金志章、呉廷華、戴廷熺、厲鶚、汪台、梁啓心、杭世駿、丁敬、張湄、江源、陳兆崙、施安、汪沆、顧之麟で、名だたる杭州詩人が一堂に会したことがよくわかる。顧之珽の詩社は「湖南詩社」と称し、「西泠十子」という明末に盛んであった詩社以来の詩社の隆盛だったという。ここにも周京の名が見える。

顧之珽が詩社を結んだ翌乾隆八年、杭世駿が杭州に戻り、詩社を結んだ。杭世駿の詩社については、次のように記される。

武林自西湖八社而後、風雅衰息幾二百年。余被放帰田、於南屏開設壇坫。金江声観察、丁鈍丁隠君、周辛老、厲樊榭両徴士、牽連入社、与君為文章性命之友。
（杭世駿『道古堂文集』巻四十五「朝議大夫刑部貴州司主事呉君墓表」）

武林　西湖八社よりして後、風雅衰息すること幾んど二百年。余放たれて帰田し、南屏に於いて壇坫を開設す。金江声観察、丁鈍丁隠君、周辛老、厲樊榭両徴士、牽連として社に入り、君と文章性命の友と為る。

南屏に詩社を開いた、とあるが、これがいわゆる南屏詩社である。『道古堂集』の汪沆序には、直接「南屏詩社」という名称が見える[12]。詩社に入ったものとして、金志章、丁敬、周京、厲鶚の名が挙がっている。周京は杭世駿の詩社の中核となるメンバーであったと考えてよいだろう。南屏詩社と顧之珽の湖南詩社を同じものとする見解と異なるものとする見解とがあるが、いずれも同じメンバーから成立しており、名称はともかく、実質的な活動内容は同じものと考えてよいだろう[13]。南屏詩社の成員については、残された詩や聯句から推定することができる。杭世駿の「春日懐吟社諸公却寄八首」（『道古堂詩集』巻十七）には、朱樟、呉廷華、梁啓心、呉城、丁敬、汪台、金農、王曽祥、符曾、沈甲、張燈、殳閏、舒瞻、施安、周京、施謙、傅王露、大恒（明中）、譲山、金志章、戴廷熺等の名が挙がっている[14]。杭州ではこれだけでなく、様々な詩会が開催されたのだが、その中に常に名前が登場するのは周京であった。

銭塘陸曽禹汝諧、…汝諧嘗与毛稚黄、及陸進蘆思、呉允嘉志上、徐張珠暎川、逢吉学珊、王武功雒栄、沈錫輅六飛、趙沈壎漁玉、周京穆門、銭璜他石、周崧層巖、王嗣槐仲昭、傅光遇松巖、翁必選尹若、必遠超若、朱宏直、沈可璋、解天泳、釈顕鵬輩二十人、有西湖讌会集。其後穆門及鄭筠谷、呉東壁、厲樊榭、杭・浦、丁竜浤、張柳漁、陳句山、施竹田、汪西灝、金志章、江声、戴廷熺鸝亭、汪台復園、梁啓心菉林、江源敬斎、顧之珽月田、之麟寸田、湖南詩社吟賞為盛。
（楊鍾羲『雪橋詩話続集』巻三）

銭塘の陸曽禹汝諧、……汝諧嘗て毛稚黄、及び陸進蘆思、呉允嘉志上、徐張珠暎川、逢吉学珊、王武功雒栄、沈錫輅六飛、趙沈壎漁玉、周京穆門、銭璜他石、周崧層巖、王嗣槐仲昭、傅光遇松巖、翁必選尹若、必遠超若、朱宏直、沈可璋、解天泳、釈顕鵬輩二十人と、西湖讌会集有り。其の後穆門及び鄭筠谷、呉東壁、厲樊榭、杭・浦、丁竜浤、張柳漁、陳句山、施竹田、汪西灝、金志章、江声、戴廷熺鸝亭、汪台復園、梁啓心菉林、江源敬斎、顧之珽月田、之麟寸田、湖南詩社に吟賞し盛と為す。

ここでは、南屏詩社以前の詩会として「西湖讌会集」が挙げられている。後の湖南詩社の唱和と合わせ、い

ずれの詩会にも参加しているのは周京だけである。杭州の様々な詩人の唱和詩の記録に周京の名は見え、周京が精力的に詩会に参加していたことがわかる。時には、周京が主催したと思われる詩会もある[15]。『無悔斎集』を見ても、乾隆年間に杭州に帰って以後は、複数の詩人との唱和詩が多く、周京の詩作が詩会と切り離せないものとなっていった様子がうかがえる。

そうした中で、清代杭州詩史に残る大規模な詩会が二度開催された。一度は乾隆九年（一七四四）七月十二日に、詩社同人である汪台が私園「復園」に杭州詩人達を招いて開催した復園での詩会である。その様子は「復園紅板橋詩」（『武林掌故叢編』所収）にまとめられ、刊行された。この詩会には周京を筆頭に、顧之珽、金志章、許承祖、鄭江、厲鶚、丁敬、梁啓心、金農、呉城、杭世駿、魯曽煜、釈明中、釈篆玉、崧亭、祝維誥、銭載、許大綸、汪仲鈖、汪台の二十名が参加し、各人の詩の他、「二十人姓氏爵里考」なる簡単な伝記資料が付けられている。参加者は全て浙江の詩人で、うち十四名が杭州詩人である。これ以前に、揚州の韓江詩社あるいは天津の水西荘の詩社で、詩会が盛んに開かれ、盛事と称賛されたが、いずれの詩壇も、客人として迎えた杭州を始めとする浙江詩人が詩社の中心となっており、浙江の名士によって詩壇の名を高めていた。一方、乾隆初期の杭州詩会は、それらの地方都市の詩社の中心となって活躍した杭州詩人達が、一堂に会した詩会であり、杭州という一地方の詩会でありながら、広く注目を集めるものとなった。「復園紅板橋詩」の巻末には、附録として杭州内外の詩人による題詠が附されている。その面々を全て挙げることは省略するが、姚鼐、呉錫麒はじめ、学者、芸術家として知られる人々が名を連ねており、この詩会に対する注目度と詩会の質の高さというものを窺わせる。その詩会で最初に詩が記載されるのが周京である。

更に二年後の乾隆十一年三月三日、杭州では更に大規模な詩会が開かれる。それが杭州知府鄂敏が主催した「西湖修禊」である。集まった詩人は六十一名、うち浙江出身でないのは、鄂敏を含めて七名のみ。他は全て浙江の詩人であり、三十五名が杭州詩人である。参加者一覧は以下の通り。

梁文濂、周京、金志章、金農、厲鶚、丁敬、張湄、陳兆崐、呂伊、呉城、施安、陸秩、呉玉増、施庭樞、周宸望、丁健、呉璠増、施学濂、呉玉墀、厲志黼、許大綸、孫陳典、胡兢、汪台、梁啓心、顧正謙、杭世駿、王曾祥、顧之鱗、張燈、皇甫鯤、孫庭蘭、杭世瑞、趙一清、呉中麟、茅応奎、孫林、周羽逵、魯曽煜、陸培、張雲錦、葉鑾、陸騰、施謙、許承祖、全祖望、銭石載、徐以震、徐柳坤、明中、譲山、篆玉、劉琦、汪啓淑、施念曽、舒瞻、周宣猷、余緒光、鄂敏。

それまで詩会を主催していた顧之珽は、この前年に亡くなっており、名が見えない。しかしながら、これだけの大人数が参加する詩会というのは、杭州でも類がなく、杭州の一大盛事であった。この詩会は「西湖修禊詩」一巻として刊行された。杭州最大の詩会をまとめた詩集において、序は主催者たる鄂敏が書いているが、後序は周京が書いている。これは周京が詩壇の代表者たる位置にいたことを示すものである。

このように、乾隆初期の杭州の詩会には常に周京の名が見え、重要な詩会では詩壇を代表する者として登場しているのである。

四、詩会の領袖

周京が杭州詩会の領袖であったことを直接示すのが、「杭之詩人為社集、群雅所萃、奉穆門為職志。（杭の詩人　社集を為し、群雅の萃まる所、穆門を奉じて職志と為す。）」（全祖望『鮚埼亭集』内篇巻十九「周穆門墓志銘」）の一文である。また他にも厲鶚「哭周穆門先生」（『無悔斎集』附録）に「山水空留汐社期（山水空しく留む　汐社の期）」の句があり、自注に「六年来同人結社湖上、先生為之領袖（六年来同人湖上に結社し、先生之が領袖と為る）」と言う。これは乾隆期の杭州詩壇隆盛の折、周京が詩社の領袖であったことを示すものである。また、梁文濂「哭周穆門先生」には「武林風雅甲天下、招邀朋輩聯詩盟。推君高座主壇坫、紀律厳于細柳営。（武林の風雅　天下に甲たり、朋輩を招邀して詩盟を聯ぬ。君を高座に推して壇坫に主たらしめ、紀律　細柳営より厳たり。）」とあり、これも周京を杭州詩会の領袖として皆が推したことを言うものである。また、「周京…晩歳息影湖山里中為社集者、咸為職志。（晩歳　湖山に息影し　里中の社集を為す者、咸職志と為す。）」（『国朝杭郡詩輯』巻十七　周京）からも、周京が隆盛期の杭州詩壇の領袖として認識されていたことがわかる。

このように、乾隆初期の詩社の最盛期において、周京は杭州詩社の領袖たる存在となっていたのであるが、それはなぜか。以下、その要因を考えてみる。

まず、遠遊に出る以前から厲鶚らとの詩会ですでに領袖的存在だったという点である。厲鶚が二十代の頃、年上の周京を首唱として仲間達と詩会を楽しんでいたことは、先に厲鶚「無悔斎詩集序」で見たとおりである。その様子をここに再度挙げてみると、「酒闌灯灼、逸韻横飛、必推周兄穆門為首唱。穆門詩主気格、以豪健為尚、淋漓排奡、往往一座尽傾。詩成、毎撃節自歌、淵淵乎声若出金石、予輩亦従而和之。少年気盛、曽不知老之将至也。（酒闌に灯灼えんとし、逸韻横飛するに、必ず周兄穆門を推して首唱と為す。穆門　詩は気格を主とし、豪健を以て尚しと為し、淋漓として奡を排し、往往一座尽く傾く。詩成れば、毎に節を撃ちて自ら歌ひ、淵淵乎として声　金石より出づるが若く、予が輩も亦た従ひて之に和す。）」と、周京の豪放で気品高い詩に一座が圧倒され、その歌に皆が和した様

子を伝えており、当時周京は若者たちを惹きつけ詩会を牽引する特別な存在であったことがわかる。乾隆初期の詩社には、厲鶚と同世代の鄭江、呉廷華、符曾らが参加しており、彼らにとってそれは若い頃の活気あふれる詩社の再現でもあったろう。乾隆八年からの詩会の隆盛時、厲鶚は五十代で既に名を知られていたが、その厲鶚が「如君行誼友兼師（君の行誼の如きは友師を兼ぬ）」（『無悔斎集』附録　厲鶚「哭周穆門先生」）というように、周京を師と仰いだことも、皆が領袖と認める一因となったと考えられる。

更に、周京は詩壇の最年長者であった。杭世駿より十九歳、厲鶚より十五歳年上であった周京が、一歳年下の顧之珽が乾隆十年に世を去って以後、最長老の立場になったことも、領袖に推されるにたる理由であった。

また詩そのものが文学的に評価されたということも、詩会の領袖たるうる要件であろう。遠遊に出る以前から、周京の詩名がすでに高かったことは、「穆門以詩名天下五十余年。（穆門詩を以て天下に名あること五十余年。）」（全祖望「周穆門先生墓志銘」）からもわかる。乾隆期の詩社でも、同人達は周京の詩の巧みさを認めていた。詩壇の主催者でもあった杭世駿は、「春日懐吟社諸侯」第五首で周京を取りあげ、その尾聯に次のように言う。

月翁辛老紛遺稿　　月翁辛老　遺稿紛たり
次第煩君棗木鐫　　次第君を煩はして棗木鐫す

自注「舒明府瞻与施上舍安、謀刻顧行人之珽、周徵君京遺詩、周詩已竟工矣。」

自注「舒明府瞻と施上舍安と、顧行人之珽、周徵君京の遺詩を刻せんことを謀る。周詩已に竟に工なり。」

（『道古堂詩集』巻十七『嶺南集』「春日懐吟社諸侯」第五首）

これは舒瞻が、施安とともに顧之珽と周京の遺詩を刊行しようとしたことを記したものであるが、自注の最後に、「周詩已竟工矣」と周京の詩の工であることを述べている。同じく刊行の対象となっている顧之珽については何も評していないことから、周京の詩を特に認めていたことがわかる。また朱樟も「句法驚流輩、交情振古風。（句法　流輩を驚かしめ、交情　古風に振るふ）。」（『無悔斎集』附録「哭周穆門先生」）と詩の非凡さを讃え、梁啓心は「墓門表碣題徵士、身後文章属大家。（墓門表碣　徵士と題するも、身後文章大家に属す。）」（『無悔斎集』附録「歳庚午春仲同人至湖上埽穆門先生墓用皮襲美弔張処士韻」）と、身分としては無名の存在であっても、文学的評価によって周京が世に伝えられるであろう、と述べている。乾隆年間の詩会にあって、周京の詩の巧みさは定評があったと言える。

更に書家として知られていたことも、とりわけ詩会

での人気を集めたと考えられる。金農が「詩編伝北郭、書蹟満東呉。（詩編は北郭に伝はり、書蹟は東呉に満つ。）」（『無悔斎集』附録　金農「哭周穆門先生」）と述べているように、周京は詩と書とのいずれでも名があった。全祖望の墓志銘に見える「詩成穆門以長箋写之、酔墨淋漓、姿趣頽放、或弁数語於其端、得者以為鴻宝。（詩成れば穆門　長箋を以て之を写し、酔墨淋漓、姿趣頽放たりて、或ひは数語を其の端に弁ずれば、得る者以て鴻宝と為す。）」という逸話は、詩会で周京の詩とともに、書が求められたことを示すものである。「書法奇逸、酒酣興到数十紙立尽。（書法奇逸、酒酣にして興到れば数十紙立ちどころに尽く。）」（『民国杭州府志』巻一百四十五　周京）も詩会の光景であるが、周京が酒に酔い興に乗って勢いよく筆を走らせた書が詩会を盛り上げた様子がうかがえる。

こうした要素に加え、周京の人柄もまた同人達が慕った一因であろう。符曾は「穆門文章、書法為世所推、何待予言。惟生平高節人、未及知、不敢不為之闡揚者。（穆門文章、書法は世の推す所と為る、何ぞ予の言ふを待たん。惟だ生平高節の人たるは、未だ知るに及ばざれば、敢えて之が為に闡揚せずんばあらざる者なり。）」（『春鳧小稿』「挽周穆門」注）と、詩と書はすでに世に知られているが、自分が喧伝したいのは、周京の高節だと力説している。また全祖望の墓志銘も周京の高節を記す。

其人淵然湛然、莫能窺其涯涘、渾淪元気、充積眉宇、蓋古黄叔度、陳仲弓之流也。士無賢不肖、皆曰、「周先生長者。」乃其中則有確乎不可拔者、而不以形迹自見。大科之役、姚侍郎三辰薦之、穆門力辞不得、応徵至京、徘徊公車門下数日、称疾卒不就試以帰、莫能測也。已而始服其高。

其の人淵然湛然として、能く其の涯涘を窺ふ莫く、渾淪たる元気、眉宇に充積し、蓋し古の黄叔度、陳仲弓の流なり。士は賢不肖と無く、皆曰く、「周先生は長者なり」と。乃ち其の中には則ち確乎として抜くべからざる者有りて、形迹を以て自ら見はれず。大科の役、姚侍郎三辰　之を薦め、穆門力めて辞するも得ず、徵に応じて京に至り、公車の門下を徘徊すること数日、疾と称して卒に試に就かずして以て帰るは、能く測る莫きなり。已にして始めて其の高きに服す。

「黄叔度」は漢の黄憲のこと。字を叔度といい、孝廉に挙げられ、公府に召されて都に上ったが、仕官せず帰った。その品性の高潔さ学問の高さを評された人物である。「陳仲弓」は、後漢の陳寔（ちんしょく）のこと。字を仲弓という。清廉な人物として知られ、宦官の専横に反対して党錮の禁を受け、以後請われても出仕することはなかった。周京も博学鴻試に推挙され、断り切れず上京して、結局病と称して帰郷した。そして困窮のうちに生きたのである。この高潔さに皆感服したとい

う。厲鶚もやはり博学鴻試に応じずに帰っており、杭世駿もまた皇帝に忌憚の無い意見を突きつけて罷免されている。このように俗世の栄誉に背を向けた詩人達が集まったことも、詩社の名声を高めた一因である。その中で遠遊を続け、貧しい中で友人や家族を助けた逸話を多く残す周京は[16]、詩社同人の尊敬を集めることとなり、領袖たり得たのであろう。

五、周京の詩風と浙派

さて、ここで改めて周京の詩風がいかなるものであったかをみておこう。厲鶚の「無悔斎詩集序」（『無悔斎集』）は、周京の詩の特徴を、時期にわけて説明する。まず若い頃の詩を「詩主気格、以豪健為尚。（詩は気格を主とし、豪健を以て尚しと為す。）」とし、遠遊で見聞を深めた時の詩については「其豪也根于理、其健也閲乎境。其の豪たるや理に根ざし、其の健たるや境を閲す。）」と、その豪健さに実体験に基づく奥行きが加わったことを指摘する。晩年の詩社での詩については、「白鴎導我有閑意、青柳笑人成老夫。（白鴎　我に閑意有るを導き、青柳　人の老夫と成るを笑ふ。）」（「三月十四日寿門樊榭抱樸同酌江声于湖上分韻」（『無悔斎集』巻十一））[17]の句をとりあげ、「此其胸中豈有纎毫流俗者哉。（此れ其の胸中豈に纎毫も流俗なる者有らんや。）」と、俗と相反する高潔な精神を反映するものと評している。なおこの句には、沈徳潜も「風趣可挹（風趣挹むべし）」（『国朝詩別裁集』巻二十九）という賛辞を与えている。このように、豪放なる詩風を根底に、経験と歳を重ねるにつれ、奥行きを加え、高潔で風趣に富む詩風となっていったというのが、厲鶚による分析である。また沈徳潜は、周京の詩について「詩体和平中正、不為鑱刻艱深之語。（詩体は和平中正、鑱刻艱深の語を為さず。）」と、小難しい言葉を無理矢理使うことなく、和平中正なものであるとも評している。まとめると、飾り気がなく、豪放で気品をがあり、旅の経験に基づく深みがあり、且つ「清曠越俗」（舒瞻「無悔斎集序」）というべき、俗とかけ離れた清なる風格がある、というのが、周京の詩の特徴といえよう。

ところで、周京は、厲鶚を中心とする浙派といわれる詩派の一員として捉えられることが多い。「呉焯、周京等人、這是一批与厲鶚存有師友之誼、唱和頻頻、対「浙派」的発展很有関係的詩人。……高峰期正是乾隆期、周京是個核心人物。（厳迪昌『清詩史』浙江古籍出版社　二〇〇二「第六章　乾嘉時期地域詩派詩群巡視　第一節　以厲鶚為代表的浙派」）とあるように、周京は浙派の領袖とされる厲鶚と師友の関係にあり、また浙派の最盛期とされる乾隆年間の杭州詩会の時期に、厲鶚と頻繁に唱和したことから、浙派の中核となる人物である、とする見方である。

ところで厲鶚を中心とする浙派は、宋詩の尊重を始め幾つかの特徴を持つが、尤も特徴的とされるのが、豊富な知識に基づいて詩の字句に凝った点であろう。

吾郷詩有浙派、好用替代字、蓋始于宋人、而成于厲樊榭…樊榭在揚州馬秋玉家、所見説部書多、好用僻典及零碎故事。（袁枚『随園詩話』巻九-八三）

吾が郷の詩に浙派有り、好んで替代の字を用ふるは、蓋し宋人に始まりて、厲樊榭に成る。…樊榭　揚州馬秋玉の家に在り、見る所の説部の書多く、好んで僻典及び零碎なる故事を用ふるなり。

浙派詩喜用新僻小典、妝点極工緻、其貽譏餖飣即在此、厲樊榭亦然、冬心尤以此自喜。此杭州南屏詩社一派也。

（徐珂『清稗類鈔』文学類「金冬心詩為南屏詩社派」）

浙派詩喜んで新僻小典を用ひ、妝点は工緻を極め、其の餖飣を貽譏せらるるは即ち此に在り、厲樊榭も亦た然り、冬心尤も此を以て自ら喜ぶ。此れ杭州南屏詩社一派なり。

『随園詩話』は、蔵書の書籍から得た豊富な知識によって僻典や微細な故事を用い、そのために言葉の言い換えが多かった厲鶚の詩法を、浙派の特徴として挙げている。また『清稗類鈔』では、僻典を好み、字句の工夫を凝らして、古語を弄ぶと批判されたことを記し、厲鶚と金農がこの傾向にあり、これが杭州南屏詩社一派だとしている。

ここで注目されるのは、学識をもとに典故や文字遣いに凝った浙派を、南屏詩社詩人ととらえていることである。厲鶚、杭世駿、金農は浙派の代表とされるが、彼らがいずれも南屏詩社の社員だったためである。乾隆期の浙派イコール南屏詩社ととらえる論考は少なくない。鄭幸「南屏詩社考」（『厦門教育学院学報』第九巻第二期　二〇〇七）では、「南屏詩社已経不僅僅是一個簡単的文学団体、其社員共同的芸術追求和旨趣愛好、無形固化為一種独特的審美風格、并被後世冠以狭義「浙派」之名而流伝千古。這也確実是很多所謂流派的産生模式、即有着相同或相近旨趣愛好的文人彼此吸引彼此結交、在形成一個并不厳格的交游圏的同時、又互相影響彼此的詩文風格、最後形成某種能被総結的規律性特徴。」と、南屏詩社が同じ嗜好の詩人たちの集まりだと考えている。しかし、周京の「詩体和平中正、不為鑱刻艱深之語。」という詩風は、上記の浙派の特徴とは正反対のものである。しかも、この周京が「杭之詩人為社集、群雅所萃、奉穆門為職志。」（全祖望「周穆門先生墓志銘」）とあるように、南屏詩社の詩会で領袖であったということを考え合わせると、南屏詩社が、そのまま浙派であるという考え方は、事実とそぐわない。また、浙派の代表とされ南屏詩社の主人公でもあった杭世駿も、次のように述べている。

余嘗謂、風雅一事、雖各有承稟、要以持人情性足尚。依阿為随、歩趨不易、如明七子、十子及国朝西泠十子、考辞懐響、若出一手、比観数集、輒令人気

索。吾里詩人則或尚豪健、或擅敷腴、或務堅瘦、或披豁群紛、或原本積冊、有専長無定格、期達吾志以止。昔月田為社時、毎軒衣張眉、援筆無所顧譲、及閲諸人作、則撫髀歎曰、「何哉、筆陣参差変異若是。公等其各為雄長可矣。」

（杭世駿『道古堂文集』巻十二「遠村吟稿序」）

余嘗て謂へらく、風雅の一事、各の承稟有りと雖も、要ず人の情性を持するを以て尚ぶに足る、と。依阿として随を為し、歩趨易へず、明七子、十子及び国朝西泠十子の如きは、考辞懐響、一手に出るが若く、数集を比べ観るに、輒ち人をして気索たらしむ。吾が里の詩人は則ち或ひは豪健を尚び、或ひは敷腴を擅にし、或ひは堅瘦に務め、或ひは群紛を披豁し、或ひは原本積冊し、専長有りて定格無く、吾が志を達するを期して以て止む。昔月田社を為りし時、衣を軒げ眉を張る毎に、援筆に顧譲する所無く、諸人の作を閲するに及び、則ち髀を撫して歎じて曰く、「何ぞや、筆陣参差として変異是の若し。公等其の各の雄長たるを為せば可なり」と。

杭世駿は、明七子、十子、明末の西泠十子を引き合いに出し、集団で修辞や詠まれる感慨が皆似ているような作品を作ることを、強く批判している。それに対し、杭州の詩人は、豪健、敷腴、堅瘦、群紛と異なる詩風であり、また書籍の知識から作る者もあり、定格がなく、思うことを詠ずることのみを目指している、と述べている。「月田為社」とあるのは、顧之珽が詩社を開いた時のことである。先に述べたように、杭世駿の一年前に顧之珽が詩社を開いているが、杭世駿が翌年開いたとされる「南屏詩社」も、参加者が同じであるため、これは南屏詩社のことでもある。杭世駿が語る南屏詩社の特徴は、詩人ごとに詩の特徴が異なっており、皆得意なところを生かして詩を作っている、ということであった。つまり、南屏詩社が、浙派という一つの特徴的な作風を目指す集団である、という考え方は、事実とはかけ離れているのである。いわゆる浙派詩の特徴とは全く異なる詩風を誇った周京が南屏詩社の領袖であったことが、そのことを示している。

事実、南屏詩社は、それまで異なる地域で、異なる人生を歩んできた詩人たちが年齢を重ねた後で集まった集合体であり、揚州の蔵書家のもとにいた厲鶚や金農と、長く北方を旅していた周京とが、同じ詩風の詩を作ることの方が不自然なのである。

厲鶚、杭世駿、金農といった詩人だけをみれば浙派であり南屏詩社詩人であるが、当時のリーダーが周京だったという点に注目すると、南屏詩社は浙派以外の要素も多く含む、柔軟な集団だったと言えよう。

先に、文学史の中で、周京が時に浙派からはずされ、時に浙派の重要人物として扱われる矛盾があることを述べたが、それは浙派を南屏詩社とイコールに捉えるかどうかによる。結論からいうと、南屏詩社は浙派詩

人集団というわけではなく、また周京は南屏詩社の詩会における領袖ではあったが、決して浙派の中核的詩人ではなかった。この点は、浙派及び杭州の詩社の問題を考える時に注意すべき点であろう。

おわりに

乾隆初期の詩社は、厲鶚、周京はじめ、多くの帰郷した杭州詩人達によって、かつてない隆盛期を迎えた。しかし、その隆盛はやがて終わる。この詩壇は、名士の集合体として人気を得ており、詩人が亡くなるということは、それだけ詩社が縮小することであった。

梁同書行述略曰、…吾郷詩社自癸亥以後称最盛者十年、毎一会率二三十人、緇袍朱履布衣韋帯之流、靡不畢集、社中自顧月田、鄭筠谷、周穆門、金江声、朱鹿田、呉東壁、厲樊榭、施竹田諸先生相継下世、風流雲散、詩社遂已。

（『両浙輶軒録』巻十九　梁啓心）

梁同書行述略に曰ふ、…吾が郷の詩社　癸亥より以後　最盛と称する者十年、一たび会する毎に率ね二三十人、緇袍、朱履、布衣、韋帯の流、畢集せざるは靡し、社中　顧月田、鄭筠谷、周穆門、金江声、朱鹿田、呉東壁、厲樊榭、施竹田諸先生相継いで世を下りてより、風流雲散し、詩社遂に已む。

この文は、杭州の詩社が乾隆八年から十年の最盛期を迎え、やがて相次ぐ詩人達の死によって、衰退していったことを述べている。杭州の詩社は、参加する詩人の存在によってのみ成り立っていたということであろう。詩社の主催者の一人であった顧之珽の死について、杭世駿は「迨月田下世、西湖壇墠稍就衰歇。（月田下世するに迨び、西湖の壇墠稍や衰歇に就く。）」（杭世駿『道古堂文集』巻十二「遠村吟稿序」）と、顧之珽の死とともに詩壇が衰退すると述べている。また周京の死についても「湖南寂寞吟壇冷、愁聴松風咽杜鵑。（湖南寂寞として吟壇冷え、愁ひて聴く　松風に杜鵑の咽ぶを。）」（『無悔斎集』附録　金志章「哭周穆門先生」）と、吟壇つまり詩社が冷えてゆくことと結びつけられている。彼らの死は、一詩人の死であるとともに、詩社を支える存在の喪失として捉えられている。周京、顧之珽は、当時の詩社の領袖として人気があったが、詩会抜きで名があったかといえば、決してそうとはいえない。

先に、袁枚が『随園詩話』で、周京の題壁詩が書かれた酒楼を通りかかった時に、七、八年を経ても周京を敬愛する人達によって題壁詩が大事に守られていたことを記す文を見た。しかし、その文には続きがある。

後四十年、余再至湖上、則壁詩無存。西穆、樊榭久帰道山、而酒楼主人亦不知名士為何物矣。

（『随園詩話』巻九-八二）

後四十年、余再び湖上に至れば、則ち壁詩存する無し。西穆、樊榭久しく道山に帰りて、酒楼の主人も亦た名士の何物為るかを知らざるなり。

四、五十年経って再び西湖のほとりに行くと、すでに題壁詩はなくなっていた。周京、厲樊榭が亡くなってから時間が経ち、酒楼の新しい主人も、作者である周京という名士を知らなかったのである。同じ詩社の中でも、厲鶚は『宋詩紀事』『絶妙好詞箋』他、評価の高い多くの著書によって、今日まで名を知られている。杭世駿は、元来高官であった上に、著書も多く、やはりその名を残した。しかし周京は、詩会という、一時的な場の中での名士であった。詩会の詩の多くは、各詩人の詩集にその人自身の詩が収録されるのみで、ほとんど記録が残らない。周京の作品をまとめたものとしては、僅かな詩集を残すのみである。詩人の死によって詩社は滅ぶのだが、詩社の死によって、詩人もまた滅んだのである。

杭州の詩社の隆盛期には、詩会という華やかな文化があり、様々な詩人がその時だけの活動を行っていた。時を経て、詩会が衰退するとともに、詩会の活動は忘れられて重視されなくなり、一部の浙派と称される詩人たちの作品に見える、特徴的詩風だけが注目されるようになった。しかし、その時だけのものとして消えていったものの中にこそ、その時代の文化があるのではないだろうか。杭州詩壇における周京の存在は、まさにそうした時代の息づかいを教えてくれるものであろう。

注

[1]『皇清書史』巻二十一（遼海叢書）に「周京、字西穆、一字少穆、号穆門、一号辛老、晩号東双橋居士。」とある。しかし、「辛老」については、呉城「哭周穆門先生」（『無悔斎集』附録）第四首第五句「字記老忘辛」自注に「先生一字辛老」とあるのに基づき、字とした。「東双橋居士」については全祖望「周穆門墓志銘」（『鮚埼亭集』内篇巻十九）に、「暮年、別自署東双橋居士。東双橋者、副都所居鄞城北坊第也。」）とそのいわれを説明している。

[2]厲鶚「無悔斎集序」（『無悔斎集』巻首、厲鶚『樊榭山房文集』巻三）に「令嗣宸望以遺稿属予点定、略為刪汰其什之二三。鏤版以行者、故人舒明府雲亭」とある。

[3]桑調元「周徵士穆門墓志銘」（『無悔斎集』〔清代詩文集彙編所収〕附録に「著有無悔斎集、古文詩詞共三十六巻、舒明府瞻為先刻詩十五巻行世、厲樊榭編定、余存于家。」とある。桑調元の墓志銘は『清代詩文集彙編』（上海古籍出版社　二〇〇九）所収『無悔斎集』（乾隆十七年刻本影印）にはあるが、『四庫全書存目叢書』（台南荘厳文化事業有限公司　一九九七）所収『無悔斎集』（浙江図書館蔵清乾隆刻本影印）には収録されない。

[4]全祖望『鮚埼亭集』内篇巻十九「周穆門墓誌銘」に「穆門之卒也、吾友杭堇浦為之伝。」とあり、楊注では「道古堂集中無此伝、恐刻時刪去。」と、道古堂集刊行の時に削除されたものとする。

[5]周京『無悔斎集』による。

[6]「第三階段是浙派的繁栄期、主要創作活動在雍正朝与乾隆前期。此期詩人以厲鶚為職志、以南屏詩社成員為主体、有杭世駿、全祖望、金農、丁敬、胡天游、呉穎芳、汪沆、陳章、姚世鈺、斉召南等人、這也就是所謂狭義的浙派詩群。」（張仲謀『清代文化与浙派』総序　東方出版社　一九九七）

[7]『樊榭山房集』巻二辛丑「夏至前一日同少穆耕民汎湖」、これは『無悔斎集』巻二辛丑「夏至前一日泛湖至清隠菴」と同時の作と思われる。『無悔斎集』は、共に詩作した詩人の名を記さない。しかし、「露坐同厲太鴻聯句」、「聞蛩同太鴻」等、厲鶚（太鴻）と共に詩や聯句を作った記録が残っている。

[8]康熙六十一年に完成したとされる『樊榭山房集外詞』秋林琴雅四に「点絳脣（灯夕同宋杏洲周少穆集呉尺鳧瓶花斎）」があり、呉焯と周京と厲鶚が共に詞を作ったことが記されている。呉焯は周京の一歳年上で正に同世代の友人であった。呉焯と沈嘉轍は共に雍正十一年に世を去るが、『無悔斎集』巻六に「十二月二十二日同樊榭、耕民放舟湖上、時快雪初晴、風物閒静、重過酒舎、念欒城、尺鳧已下世、感今念昔、弥覚清游之足重也、分韻同作」があり、昔から沈嘉轍（欒城）、呉焯（尺鳧）らと交流があったことがわかる。また、『民国杭州府志』（巻一百四十五）杭世駿の伝には、「罷帰後、杜門奉母、自号秦亭老民、偕里中耆旧及方外友、結南屏詩社。先与同里厲鶚、周京、符曾、施安、陳撰、趙昱、趙信、呉焯、呉城、沈嘉轍、汪沆、呉穎芳、丁敬、張沅為密友近賓、言懐叙歓、各有搆属。」とある。南屏詩社は乾隆始めの杭世駿による杭州の詩社であるが、それ以前の若い時に、周京を含め、皆詩作を共にする友人であったことがわかる。

[9]『無悔斎集』では、この詩を雍正十一年の作とする。一方、厲鶚の「臘日同周少穆汎湖」（『樊榭山房集』巻七）は、自注に「時尺鳧欒城俱下世」とあることから、周京の詩と同時の作と考えられるが、雍正十二年の作としている。

[10]桑調元「周徵士墓志銘」（『無悔斎集』附録）に「友人延修沢州府志、陵川邑志」とあり、朱樟も「哭周穆門先生」第六首「攀借如椽筆、分脩劇郡書。」の句に「謂脩郡志」との自注をつけている。

[11]「大科之役、姚侍郎三辰薦之、穆門力辞不得、応徴至京、徘徊公車門下数日、称疾卒不就試以帰、莫能測也。」（全祖望「周穆門墓志銘」）

[12]「帰而杜門奉母、暇則偕里中耆旧襟契及方外之侶結南屏詩社、歌詠太平。」（『道古堂集』汪沆序）

[13]南屏詩社については、鄭幸「南屏詩社考」（『厦門教育学院学報』第九巻第二期　二〇〇七）、劉正平「南屏詩社考論」（『北京大学学報（哲学社会科学版）』第五十巻第三期　二〇一三）に論考があり。鄭江は南屏詩社は湖南詩社の別称ととらえ、劉正平は、湖南詩社が先にあり、

顧之斑の死去に伴い、杭世駿の南屏詩社に合併されたとする。

[14]成員の詳細については、鄭幸「南屏詩社考」、劉正平「南屏詩社考論」（既出）が参考となる。

[15]施安『旧雨斎集』巻五「花朝穆門招遊北郭至皐亭看桃花即送柳漁入都分韻二律」（乾隆九年）、厲鶚『樊榭山房続集』巻七「穆門招同諸公汎舟甘村看花分韻二首」（乾隆十四年）等。

[16]全祖望「周穆門先生墓志銘」には、周京が、留守中に弟に家を売られてしまっても文句一つ言わず家を借り、亡くなった友人の娘三人を世話して嫁がせたことなど、様々な逸話を載せている。

[17]『樊榭山房文集』巻三では、「野」を「白」に、「新」を「青」に作る。

※本論は平成二十六年～二十八年度科学研究費補助研究　基盤研究（C）26370421「乾隆時代における、移動する杭州詩人集団の変質と展開に関する研究」の研究成果の一部である。